

# 複合動詞前項の意味に関する一考察

— 「飛び～」を対象として —

高原 瑞穂

0. はじめに
1. 研究の目的
2. 対象とする語
3. 単独動詞「飛ぶ」の意味
4. 複合動詞「飛び～」の分類と考察
5. おわりに

## 0. はじめに

これまでの複合動詞研究において、前項動詞は分析の対象とされることが少なかった。複合動詞の意味の中心は後項動詞にある、という視点から研究が行われることが多かったからである。

しかし、意味の中心がどちらにあって、その中心となる意味がどのような意味であるかという見方からだけでは、複合動詞の一側面しか明らかにはならない。異なった角度からの分析を行ってみることも必要であろう。

## 1. 研究の目的

単独用法にはない、複合動詞特有の意味を分析することが、複合動詞の全体像を考えていく上で重要であると思われる。このことは、先行研究<sup>1</sup>においても指摘されてきた。複合したときに新たな意味が発生するということは、前項と後項の意味に何らかの影響関係があるからで、複合する相手の動詞の意味が関係しているのではないかと考えられる。

今回の分析はそのような考えに基づき、前項「飛び～」の意味の全体像をつかむことに主眼を置く。そして、後項の動詞と結び付くことで初めて生まれる複合動詞前項「飛び～」特有の意味が、どのようなものかということ考察していく。

## 2. 対象とする語

今回の分析対象として、六つの辞書<sup>2</sup>と『複合動詞資料集』<sup>3</sup>から、「飛ぶ」を前項にもつ複合動詞23語を採集した。その際、『複合動詞資料集』にしかない語<sup>4</sup>、一つの辞書にしか記載がない語<sup>5</sup>、文語という記述がある語<sup>6</sup>は対象から外した。

今回対象とする23語の複合動詞は、以下の4-1.の表にすべて書き出している。

## 3. 単独動詞「飛ぶ」の意味

複合動詞「飛び～」の意味を考える上で、単独動詞「飛ぶ」の意味を理解していなければ、どの意味が単独動詞そのままの意味で、どの意味が複合動詞特有の意味なのか判別することが出来ない。単独動詞「飛ぶ」の意味、用例を確認しておく必要がある。

この分析を行う際、『日本語基本動詞用法辞典』<sup>7</sup>の意味記述、用例を参考とし、考察を加えた。他の辞書類でも、意味、用例の確認を行った。

- a. 鳥・昆虫・飛行機・物などの物体が空中を移動する。

例) 飛行機が空を飛ぶ。鳥が空中を飛ぶ。帽子が風で飛んだ。

これは、空中移動が想定出来る物体が主体となって、ある程度のスピードをもって一挙に空中を移動する意味である。この意味の場合、起点・着地点は特に必要とされない。

- b. 地面・床をけて空中に上がったり、そのようにして物を越えたりする。

例) 選手が跳箱を飛んだ。川をこちらから向こうへ飛ぶ。

このように、空中から空中の移動ではなく、有情物が自力で地上から空中を通過して、別の地点へ移動する場合でも「飛ぶ」を使うことが出来る。

この意味の場合、「跳ぶ」の表記が使われることもある。

- c. 物がはねて空中に散乱する。

例) 泥が飛んだ。火花が床に飛ぶ。

もともと存在していた場所から、空中に拡散してある領域に移動する場合

にも「飛ぶ」を使う。

a. の意味では、起点・着地点を必要としなかったが、b. c. では、文中に明示されることがなくても起点・着地点は想定されている。

d. 急いで目的地に向かう。

例) 調査団が現地に飛んだ。特派員がアラビアに飛んだ。

飛行機を使うような距離のある場所への人間の移動でも、「飛ぶ」を使うことが出来る。「隣町へ飛ぶ」といえないことを考えると、近い距離では使えず、途中を経由しない速やかな目的地への移動をあらわす場合にのみ使われる。

e. うわさ・命令などが急速に広まる。

例) 大地震のうわさが飛ぶ。緊急指令が飛ぶ。

f. 大声が浴びせられる

例) 発言者にやじが飛んだ。子供たちに父兄の声援が飛んだ。

この2つは、うわさや発言の出所である人から、別の人への目に見えない主体の移動を「飛ぶ」と表現していると考えられる。大声は発言して聞き手に届くまでの時間差はほとんどないし、うわさ、命令も、「うわさがゆっくり飛ぶ」と言えないことから、ゆっくり広がっていく状況には「飛ぶ」は使えない。

g. 途中にあるものを抜かして先へ移る。

例) 編み目が飛ぶ。話があちこちに飛ぶ。番地が飛んでいる。

実際には移動はしていないものの、途中経過がなく、一挙に先に移った主体の変化を「飛ぶ」と表現している。

h. 一瞬のうちに消えてなくなる。

例) ヒューズが飛んだ。給料が飛ぶ。

もともと電気がついていた状態、給料があった状態から、それらが一挙に変化してなくなってしまう変化を、途中経過がなく一挙に違う状況へ移る「飛ぶ」を使って表現している。

d. ~ h. までに見られた「途中経過がなく一挙に別の状況へ移る」という意味を強調して、

i. からだの一部がすばやく動く

例) 外掛けが飛ぶ。びんたが飛ぶ。

このような、体の一部（手や足）を使って、すばやくなされる動作の場合にも使われる。

ここまで見てきた「飛ぶ」の意味をまとめてみると、《主体が、もともと存在していた場所から違う場所へ（途中の過程は視点に入れずに）一挙に移動する》となる。移動距離の長さ、起点・着地点を必要とするかどうかは、それぞれの意味用法によって異なっている。

単なる移動ではなく、その動作を比喩的に転用することもあり、その場合にも、「一挙に」「速やかに」といった、ある程度以上の速度は必ず必要になる。

#### 4. 複合動詞「飛び～」の分類と考察

##### 4-1. 分類の方法

対象とする「飛び～」の複合動詞を、それぞれの語のもつ意味ごとに（ほとんどが多義であるので、その場合はそれぞれの意味ごとに）、前項と後項の意味からA～C´までの5段階に分類した。

意味の確認は辞書類を参考にし、適宜自分なりの考察を加えた。

A : 動詞+動詞の意味。

A´ : 動詞+動詞の意味だが、後項が造語成分で現在単独では使われない。

B : 動詞+動詞の持つ動作の意味を比喩的に使用。動作に重点はなく、主体の感情、主体の置かれた状況を、その動作にたとえて表現している。

C : 前項の「飛び～」が、後項動詞と結び付くことによって単独用法にはない、複合動詞特有の意味となっているもの。

C´ : 前項の「飛び～」は複合動詞特有の意味だが、後項が造語成分で、現在単独では使われない動詞が複合動詞後項として残っているもの。

まず、以下に、23語の複合動詞が先にあげたA～C´のどの分類にあてはまるかを表にしておく。

前述したように、一つの複合動詞に一つの意味しかない訳ではないので、それぞれの意味ごとに分類を行ってある。

	A	A'	B	C	C'
飛び上がる	2		1		
飛び歩く			1		
飛び移る	1				
飛び起きる				1	
飛び降りる	2				
飛び交う		1			
飛びかかる	1				
飛び越える <sup>8</sup>	2				
飛び越す	2				
飛び込む		2	1		2
飛びすさる	1				
飛び出す <sup>9</sup>	1			3	
飛び立つ	1				
飛び違う	1			1	
飛び散る	1				
飛び付く	1		1		
飛び出る	1			3	
飛び抜ける				1	
飛びのく	1				
飛び乗る	2				
飛び離れる	2			1	
飛びはねる	1		1		
飛び回る	2		1		
合計	25	3	6	10	2

#### 4-2. 分類ごとの用例

4-2. では、A～C' の分類ごとにいくつか例文をあげ、分析を行っていく。

例文は、主に『日本語基本動詞用法辞典』のものを使用した。それ以外に、他の辞書のものや作例したものもある。

その例文の複合動詞前項が、3. で確認した単独動詞「飛ぶ」のどの意味にあてはまるかを例文の後ろにアルファベットで示した。

#### 4-2-1. 動詞+動詞の意味でしかないもの

##### 《動詞+動詞の意味》

飛び上がる：飛んで上方・空中へ上がる。

例) 気球が河原から大空へ飛び上がった。／ a.

飛び越える：飛んでその上を越える。

例) 馬が障害物を飛び越えた。／ b.

飛び散る：飛んで四方に散らばる。

例) 電気のコードから火花が飛び散った。／ c.

飛び離れる：場所が遠く離れる。

例) その生徒の家は学校から飛び離れている。／ g.

他21例

Aは、複合動詞の意味の中で一番分かりやすい、前項も後項も単独動詞の意味がそのまま残っているものである。

##### 《A<sup>1</sup>：動詞+動詞の意味だが後項が造語成分》

飛びかう：多くのものが入り乱れて飛ぶ。

例) 衆議院本会議ではやじが飛びかった。／ f.

飛び込む：外から飛んで来て中に入る。

例) ボールが教室に飛び込んだ。／ a.

飛び込む：身を踊らせて中に入る。

例) 青年はがけから海に飛び込んだ。／ b.

A<sup>1</sup>は、意味的に動詞（単独動詞そのままの意味）+造語成分（同じ意味で、他の動詞の後項ともなり得る）でしかない。

#### 4-2-2. 比喩的な意味を持つもの

##### 《B：動詞+動詞の持つ動作の意味を比喩的に使用》

飛び〔跳び〕上がる：特に喜んだり驚いたりした時に、思わずはね上がる。

例) 子供たちは跳び上がって喜んだ。

このとき、実際の動作を伴うかは問題ではなく、感情表現の方に重点があると思われる。

飛び歩く：ある目的のために、忙しく方々を歩き回る。あちこちへ

行く。

例) 彼は毎日下宿探しに飛び歩いている。

どのような手段で移動をしたとしても、この複合動詞を使うことが出来るので、「歩く」という動作にまとめて表現していると考えられる。前項に「飛ぶ」という、本来ならば「歩く」と動作的に結び付くことのない動詞がきているものの、「飛び歩く」の意味を比喩的に使用することで、複合動詞として成り立っているのだろう。

飛び回る：ある目的のために、忙しく方々をかけすり歩く。あちこち訪れる。

例) 父は仕事で世界中を飛び回ってる。

他3例

「飛び回る」は、「飛んで回る」という実際の動作があるが、「飛び回るように～する」というようにその動作を比喩的に使用し、「忙しくあちこちを訪れる」という意味に転用させている。

#### 4-2-3. 複合動詞特有の意味が生まれているもの

《C：「飛び～」が、複合動詞特有の意味となっているもの》

飛び起きる：勢いよく起き上がる。

例) 夜中に地震があって飛び起きた。

飛び抜ける：他と比べて非常にかげ離れている。

例) あの学生は飛び抜けてよくできる。

飛び離れる：他と比べて大きな差がある。かけ離れている。

例) あの留学生の日本語力は他の留学生と飛び離れている。

他7例

《C'：「飛び～」の意味が複合動詞特有の意味だが、後項が造語成分》

飛び込む：勢いよく中に入る。急いで中へ入る。

例) 暑くてたまらなくなり、喫茶店に飛び込んだ。

飛び込む：思いもかけない物事が急に自分の方へやって来る。

例) 大変な仕事が私の所へ飛び込んだ。

このC、C'に分類された複合動詞は、前項が複合動詞特有の意味となっているものである。複合動詞特有の意味には2種類ある。

(1) 「勢いよく」という意味

飛び起きる：分類C参照。

飛び込む：分類C参照。

飛び出す〔出る〕：部屋の中から庭へ飛び出した〔出た〕。

：親とけんかをして家を飛び出した〔出た〕。

「飛ぶ」は、「体の一部（手や足）を使って、すばやくなされる動作」の場合にも使われるが、複合動詞化することにより、この意味が体の一部から体全体に広がって用いられ、「勢いよく後項動詞の動作をする」という意味となっている。この「勢いよく～」の意味は、動作はもちろん、ある状況になるのに「勢い」が必要だ、というような場合にも用いられる。

「勢いよく～」の場合、特に後項動詞に特徴はみられないが、単独動詞そのままの動作を表す意味が複合している。前項動詞は、後項動詞の動作の意味を強めていると考えられる。

斎藤（1986、1992<sup>10</sup>）においても、このような「勢いよく～」といった意味が「強調化」として取り上げられている。斎藤は「強調化」と「音便化」「接頭辞化」の関係を分析しているが、今回の「飛ぶ」の場合、「接頭辞化」も「音便化」も起こってない<sup>11</sup>。斎藤（1986 p 10）は、「この三者が一致して起こるわけではないことは明らかであるけれども、また一方、すなわち我々の意識の問題としては、この三者の間に強い連想関係が働くことも事実であると思われるからである。」としている。しかし、「飛ぶ」の「勢いよく～」の意味は、単独動詞「飛ぶ」の意味が変質して生まれたものと考えたほうが良さそうである。

(2) 「一つだけ他から突出した」という意味

飛び出す〔出る〕：かたつむりは目玉が飛び出して〔出て〕いる。

飛び違う：実力が飛び違っている。

飛び抜ける：分類C参照。

飛び離れる：分類C参照。

「飛ぶ」ことによって、もともと存在していた場所から遠く離れることになる。主体が起点から離れたことによって、他の起点から離れていないものと比べると、一つだけ突出した状態となる。

「一つだけ突出した」ような状態を、「出す」「違う」「抜ける」「離れる」といった、起点から移動することで起点との間に空間が出来る動詞と複合することによって表現していると考えられる。

また、これらの意味となる例文は、すべて「～ている」形の文になっている。これは単なる偶然ではない。吉川<sup>12</sup>（p 294）では、「「している」（略）



などの形は、それぞれいくつかの意味を持っている。そして、その意味が実現する条件として、「動詞の性格が大きく働いている」として、アスペクトのあらゆる形式と動詞の関係を分類している。その中に「単なる状態」をあらゆる動詞というものがあり、これには5種類あるとしていて（p 302）、その5種類の中に、「人の性質を表すもの／すぐれる、おもだつ、ずばぬける」と「その他物の性質を表すもの／四角ばる、あぶらぎる、すきとおる」があげられている。今回の「飛ぶ」の分析で、「～ている」の形になっている4つの例文は、それぞれこの二つのどちらかにあてはまる。複合動詞になることによって、新たに状態を表す意味が生まれ、それが「～ている」形で表現されていると考えられる。

この2つの意味は、単独動詞にはないものである。複合動詞化し、後項に他の動詞が接続することによって、新たに生まれると考えてよいだろう。

このような意味が接尾辞にも接続していることを考えると、この2つの複合動詞特有の意味は、「飛ぶ」の意味がなくなって接頭辞化していると考えられるのではなく、単独動詞の意味が変質し、複合動詞特有の意味になっているとするのが妥当であろう。

## 5. おわりに

ここまでみてきたように、複合動詞「飛び～」には、複合動詞そのものの動作を比喩的に使用した「比喩的な意味」、そして「勢いよく」「1つだけ突出した」という2つの複合動詞特有の意味があることが分かった。

今後は、複合動詞特有の意味は、複合する相手の動詞のどのような意味から生まれるものか、単独動詞の意味からどのように変質したものなのか、同じ語形の複合動詞がどのような多義的な意味を持つのかという点に特に重点をおき、更に細かい考察を加えていくことを課題として分析を行っていきたい。

《注》

- 1 森田（1978 p 74）に「（前略）原義からでは類推の不可能な、意味にすれを生じる複合動詞を抽出して、それらを集中的に効率よく教育していくことが望まれる。」、斎藤（1984 p 412）に「更に、複合動詞の分類ということを考えてみた場合、やはり、この「付属V」の語基という概念の果たす役割は大きいと思われる。」とある。斎藤の「付属Vの語基」とは、自立語として独立に使われる時の意味を保持してしない語基、つまり単独動詞にはない意味を生じた、接辞化していない前項、もしくは後項動詞のこと。
- 2 参考文献の中の、「学研」「三省堂」「集英社」「新明解」「岩波」「大辞林」の6つ。
- 3 参考文献参照。
- 4 「飛びおる」「飛び来たる」「飛び走る」など計10語。

- 5 「飛び返る」(『大辞林』『資料集』にもなし)「飛び下かる」(『学研』『資料集』にはあり)「飛び去る」(『大辞林』『資料集』にはあり)「飛び巡る」(『学研』『資料集』にはあり)計3語。
- 6 「飛び翔る」(『学研』)「飛び退る(しさる)」(『学研』)「とびすさる」(他の辞書にもあったので対象とした)計2語。
- 7 参考文献参照。
- 8 との辞書においても、「飛び越える」と「飛び越す」は同じ意味として扱われている。その点においていろいろと問題がありそうであるか、今回はそのことについては触れないでおく。
- 9 「飛び出る」と「飛び出す」も7 同様である。
- 10 第3章複合動詞「引く+～」の意味の多様性において分析されている。
- 11 「接頭辞化」が起っていないということは、後項に「～込む」という接尾辞が接続していることから分かる。「音便化」は、複合動詞「飛び～」においては起っているものかない。
- 12 参考文献『日本語動詞のアスペクト』所収の吉川武時「現代日本語動詞のアスペクトの研究」。

#### 《参考文献》

- 石井正彦(1992) 「動詞の結果性と複合動詞」 『国語学研究』31
- 影山太郎(1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 斎藤倫明(1984) 「複合動詞構成要素の意味－単独用法との比較を通して－」  
『国語語彙史の研究』5 和泉書院
- (1986) 「複合動詞音便形の意味－『接頭辞化』と『強調化』をめくって－」  
『宮城教育大学 国語国文』16
- (1992) 『現代日本語の語構成的研究－語における形と意味－』 ひつじ書房
- 高橋太郎(1986) 「動詞の動詞らしさについて」 『国文学 解釈と鑑賞』51 1月号
- (1987) 「動詞(その1)」 『教育国語』88
- 高原瑞穂(1995) 「現代複合動詞前項と後項の意味の関係－「～たす」を対象として－」  
『フェリス女学院大学日文学部紀要』3
- 寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味I』 くろしお出版
- 布村政雄(1977) 「アスペクトの研究をめくって－金田一的段階－」  
『宮城教育大学 国語国文』8
- 森田良行(1978) 「日本語の複合動詞について」 『講座日本語教育』14
- (1996) 『意味分析の方法』 ひつじ書房
- 金田一春彦編(1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 国立国語研究所(1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版
- 1975『日本国語大辞典』 小学館
- 1982『日本語教育辞典』 大修館書店
- 1988『学研国語大辞典 第二版』 学習研究社
- 1989『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店
- 1989『基礎日本語辞典』 森田良行著 角川書店
- 1992『三省堂国語辞典 第四版』 三省堂
- 1993『集英社国語辞典』 集英社
- 1994『新明解国語辞典 第四版』 三省堂
- 1994『岩波国語辞典 第五版』 岩波書店
- 1995『大辞林 第二版』 三省堂
- 1987『複合動詞資料集』 野村雅昭・石井正彦・林翠芳 文部省科研費報告書